

ボランティア活動に興味がある人のための体験型セミナー  
～「体験する！楽しむ！考える！繋がる！」2日間～

- 1 趣 旨 青少年教育施設におけるボランティア活動について理解を深めるとともに、必要な知識・技術を学ぶ場を提供することを通して、今後のボランティア活動についての意欲を高め、青少年教育施設で活動できるボランティアを育成する。
- 2 主 催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立淡路青少年交流の家
- 3 後 援 兵庫県教育委員会・徳島県教育委員会
- 4 日 程 令和5年6月17日（土）～6月18日（日）1泊2日
- 5 場 所 国立淡路青少年交流の家（兵庫県南あわじ市阿万塩屋町757-39）
- 6 参加人数 35名  
内訳：男性8名、女性27名（大学生・社会人6名、高校生29名）
- 7 対 象 者 ボランティア活動に参加したい、もしくは興味がある人  
（大学生、専門学校生、高校生など）

8 プログラム内容

6月17日（土）

**【青少年教育施設ってどんなところ？】 10:30～12:00**

班での簡単な自己紹介とアイスブレイクの後、講義をスタートさせた。

はじめに、参加者が現時点で抱えている「国立淡路青少年交流の家のイメージ」をA4用紙に書いてもらい班全員で共有した。「自然が豊か」や「交流」というキーワードが多く見られ、これから始まるセミナーへの期待感を高めた。その後、「キャンプネーム（セミナー中に名乗るニックネーム）」を考え、セミナーの間はキャンプネームで呼び合うことを確認した。

部屋での講義が終わった後は、「全力で楽しむ」「失敗も笑い飛ばす」という当セミナーのルールの下、9人1班に分かれグループで協力しながらゲームに取り組んだ。このゲームの順位で夕食の食材が決まるという設定から、意見を出し合いながら試行錯誤を繰り返す姿がみられ、初対面の参加者ともコミュニケーションを取りながら参加する様子が印象的だった。

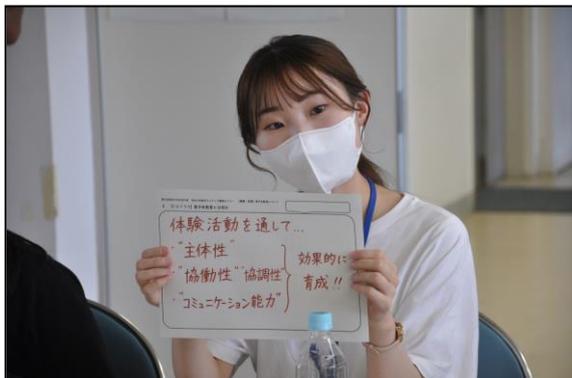


### 【青少年教育について】 12：30～14：00

交流の家所長の西岡より「青少年教育について」という講義を受けた。

はじめに、「青少年教育」とは何かを考え、グループで共有を行った。その後、青少年教育の定義や歴史的な変遷、現状について学んだ。また、講義の中で、自分の考えを发表或し、他者と考えを共有したりすることで、「青少年教育」についての理解を深めた。

参加者も、これまでに何らかの形で「青少年教育」を受けてきた場面があったようだが、改めて「青少年教育」について考える機会を持つことで、青少年教育施設でのボランティア活動を見直す機会となったようだった。



### 【アウトドアクッキング】 14：30～18：30

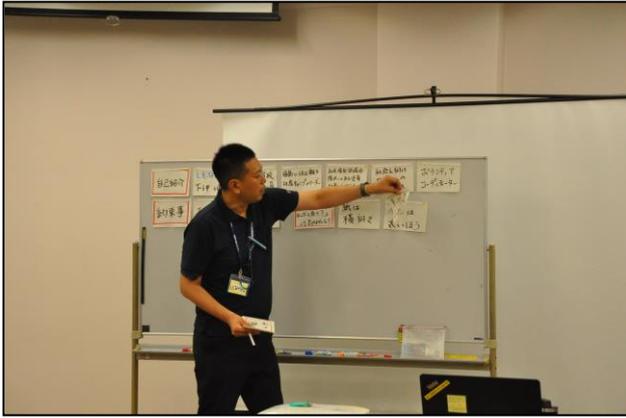
ボランティア活動の技術という実習で「アウトドアクッキング」を行った。主食や具材はくじ引きで決め、何をどのように作るかをまずはグループごとに話し合っていた。話し合いが終わった後は、自然とグループ内で役割を決め、分担して活動していた。火を起こす方法は、あえてメタルマッチや虫眼鏡、まい切り式火起こし器など、簡単には火を起こせないものを用意した。苦勞して調理したからか、どのグループも「美味しい」といってたくさん食べている様子が印象的だった。参加者アンケートには「アウトドアクッキングが楽しかった」といったような感想が多く見られたことから、参加者にとって有意義な時間になったことが伺える。



### 【ボランティア活動の意義】 19：00～20：30

初日最後の講義では「ボランティア活動の意義ってなんだと思う?」「これってボランティア?」と質問を投げかけ、ボランティアについて参加者全員で考える時間を設けた。ペアを作り、紙に書いた自分の考えを発表する機会を多く設けたことで、参加者同士の仲がさらに深まっていくのを感じた。

講義の後半は主に「WANT」「NEEDS」「CAN」という3つの言葉について考えた。視野を広く、受け皿を大きく、全ての活動者の多様な WANT と NEEDS を大切にしながら、自分はどのようなボランティア活動を行っていけば良いのか、考える時間となった。



6月18日(日)

### 【赤十字救急法】9:00~12:00

セミナー2日目は、日本赤十字社兵庫県支部から講師をお招きし、手当の基本や胸骨圧迫、AEDを用いた除細動などの一次救命処置を中心とした「赤十字救急法」について学んだ。

はじめに、傷病者を発見した際の観察の仕方を学んだ。自分の安全を確保したうえで対応にあたることや、傷病者の意識の有無で対応が異なるため、冷静に状況を判断し、その状況に応じた対応が必要であることを理解した。

続いて、心肺蘇生、AEDを用いた電気ショック、気道異物除去等の一時救命処置の基礎を実技中心で学んだ。実際に一時救命処置の技術が役に立った事例を聞いたこともあり、全参加者が熱心に取り組んだ。

3時間の講義・演習を通して、法人ボランティアとして必要な「安全管理」の技術を身に付けることができた。



### 【淡路でできるボランティア活動について】13:00~15:00

はじめに交流の家職員と先輩ボランティア3名による座談会形式で、国立淡路青少年交流の家で参加できるボランティア活動（教育事業、ブース出展等）についての紹介を行った。続いて、先輩ボランティアから「なぜ、ボランティアを始めたのか」、「ボランティアを通して、どのような学びがあったのか」、「私の失敗体験」などについても語ってもらった。生き生きと語る同年代の言葉のおかげで、参加者の聞く姿勢にも力が入っており、交流の家の教育事業の魅力や、ボランティア活動の魅力を感じてくれたようだった。また、先輩ボランティアにおいても、自分たちの思いを言語化したことで、ボランティア活動の魅力を再認識するとともに、改めて「なぜ、ボランティア活動に参加するのか」という気持ちの整理ができたようだった。



## 9 参加者の声（アンケートより抜粋）

- ・ボランティアは人のためになるだけでなく自分自身も成長できるものだと思った。
- ・多種多様な人たちと交流することの楽しさに気づきました。
- ・自分から行動して何かを得ることが大切であることに気づきました。
- ・色々な人と関わり話すことで、以前よりも自主的に取り組むことができ、積極的になれたと思う。
- ・ボランティア活動は「Can」と「Want」になりがちですが、相手側の「Needs」をしっかりと考えて活動することが大切なのだと気づきました。今までボランティア参加に対して消極的でしたが、この2日間のおかげで、今後積極的に参加していけそうです。

## 10 所感

今回のセミナーの参加者は、必ずしもボランティア活動に高い関心と意欲を持っているわけではなく「なんとなく面白そうだったから」という動機の参加者もいた。しかし、事後のアンケートでは「参加してよかった」「ボランティアへの参加意欲が高まった」「自分自身が成長できた」などの感想をいただき、概ね事業の目的は達成できたように思う。

また、当交流の家での教育事業等のボランティア活動に限らず、被災地支援や地域の清掃など「ボランティア」や「社会活動」そのものに関心を持った参加者が多く、地域社会等で活躍できるボランティアの育成につなげることができたと感じた。